玄関あけたら二秒で異世界

殻史二五二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
玄関あけたら二秒で異世界

【Ｎコード】
Ｎ４７６３Ｘ

【作者名】
殻史二五二

【あらすじ】
志賀恭平は大学が夏休みに入り、明日から友人達とキャンプを予定していた。
その前夜、一人酒盛りをしながらテレビを見ていると妖しげな超能力の番組がやっていた。そこに出ていた超能力者の所為かは知らないが、翌朝起きてルンルン気分で玄関を開けてみると、そこには視界一杯に広がる大密林が広がっていたのだった。
異世界に飛ばされた部屋と借主の恭平が送る異世界ファンタジー。恭平は無事に元の世界へと帰還することができるのか？

それとも異世界に根を下ろす覚悟をするのか？

奇跡は、信じぬ者に降りかかる。

ビールの喉越しを楽しみながら、焼いたチョリソーを摘み口へと放り込む。程よい辛味が舌を刺激して、この直後に飲むビールの旨みを引き上げる。

なんと、至高のひと時だろうか！と、男はテレビを見ながら小市民的な幸せを噛み締める。

何となく流しているテレビの中では夏恒例の心霊、超能力特集などやっている。

夏のムッとするような夜の蒸し暑さもクーラーをガンガンにかけた室内であれば関係ない。

男――志賀恭平は幸せのど真ん中にいた。

大学も夏休みに入って三日目だ。やらなければいけない課題はあるものの、悪友が企画してくれた夏休み大人達のバーベキューキャンプ合コン『どきっ！　テントにお持ち帰りもあるよ！』計画を明日からに控えて、恭平はひとり童貞卒業前祝会を開催していた。

最初は明日に備えて早くに寝ようと思っていたのだが、子供時代に遠足の前夜は眠れないという性分は大人になっても直っていないらしい。一部、大人じゃない部分があるが……

「くぁーー！　B女子大とコネがあるなんて、佐竹マジ神！」

既に五本目になるビールを開けながら、ビール缶を掲げる。

「ゴッド佐竹にカンパァーーイ！」

酔いもかなり回り、明日からの事を考えて否が応にもテンション

があがる。
調子に乗りすぎて余りの大声に隣家との壁が殴られてしまったが、これもご愛嬌だ。
ビールを飲みながらなんとなくテレビを見ていると、超能力検証なんて事が始まっていた。
テレビに映るイケメン外国人が通訳を通しながら超能力を披露している。恭平はそれらを鼻で哂いながら見ていた。

（超能力や幽霊なんて存在があるものなら是非とも見てみたいもんだ）

テレビの向こう側では場も盛り上がり、名も知らないアイドルやらモテることで有名な俳優などが感嘆の声をあげたりしている。
画面の向こうで驚いた表現がテレビに映るたびに、見ている恭平の気持ちは冷めていく。
そして、そろそろ超能力者様の出番が終わるを迎える頃になって、突然、超能力者がカメラ目線で手を向けながら何かを話し始めた。通訳を通して内容がテレビから流れる。

『これからテレビを見ている方の所へ電波を通じてパワーを送り、テレビの前の皆さんに奇跡をお見せします！』

その言葉を聞くなり、恭平は思わずふきだした。なんて、わかりやすいペテンだと……
エセ占い師やエセ超能力者が良く使う手である。あまりの使い古された手に、恭平の顔に苦笑すら浮かぶ。
何に対して奇跡を起すのか具体的には言わず、ただ漠然とした表現で身の回りで不可思議な現象を起すと言う。
恐らく単純な人間ならばいつ止まったかわからなかった時計の針やら、無くしたと思っていた物を見つけただけでも『超能力か！？』

とでも思うのだろう。
あまりの馬鹿馬鹿しさにビールを煽りながら、テレビを消そうとリモコンを手に取る。
画面の向こうには額に汗を浮かべながら、迫真の演技をしている自称超能力者が映り、その下――画面の下部にピンクの帯が『何か起きた方は番組時間中にお電話でお知らせください。電話番号はこちら』などとスクロールが流れている。
超能力者の必死の形相に対して、下にピンク色の帯がミスマッチで違和感を感じるしかない。

「必死だなぁ！　まぁ、がんばれ超能力者！　負けるな超能力者！　女房と子供が泣いてるぞっと……」

リモコンをテレビに向けた瞬間、一瞬だけ眩暈のように視界がグラッと傾いた気がした。
その時にはすでにテレビは消えて部屋は静けさを取り戻していた。

「やべ……飲み過ぎたかな？　まぁ、明日はダチの車に乗せてもらう予定だし、ダチには悪いけど車で寝かせて貰おう」

酔いが過ぎたのか妙に重くなった体を引き摺ってベッドに横になると、すぐに高イビキをかいて眠り始めた。
恭平は気付かなかった。テレビが消える寸前、画面が砂嵐になっていた事に……

適温に保たれた室内でけたたましい目覚まし音で眠りの底から引きあげられた。
古いタイプの目覚ましはベルを叩き、金切り声を上げて主を起そうとする。

それに答えたのは持ち主である恭平の無遠慮な掌だった。
恭平は手を叩き付けるように目覚ましを掴むと、いまだ睡魔を引き摺る頭で時計裏のスイッチを切る。
いつもなら二度寝へと突入するところだが、恭平にとって今日は特別な日だ。
眉を顰めながら勢い良く上半身を持ち上げて、ベッドの上に座ると寝癖の付いた頭をボリボリと掻き毟る。
今日は流石に遅刻やドタキャンなど出来るはずもないし、死んでもするつもりはなかった。
酔いはかなり醒めているはずだが、どうにも頭の芯が痺れたように意識がはっきりしない。
大きく一つ欠伸をすると、散らかっているビール缶やビール瓶を踏まないように気を付けながらダイニングキッチンに扉のある風呂場に入る。
この家で唯一自慢のトイレと別になっている風呂場の中は、学生マンションにしてはかなり広めに作られ、風呂好きな恭平はこの風呂場が気に入って、マンションをここにきめたぐらいである。

流石にこの後、予定の詰まっている状態では悠長に風呂に浸かるなんて事ができないが、シャワーを浴びる時間ぐらいならあった。
かなり、温めのシャワーで全身を洗い流すと髪を洗い、バスタオル一丁だけ腰に巻いて冷蔵庫から、飲み物をとりだした。
優雅に朝風呂、朝酒としゃれ込みたい気持ちを抑えて、作り置いておいた麦茶をコップに濯ぎ、冷たいお茶を乾いた喉へと流し込んだ。
食道を通って、胃に流し込まれる冷たい感触に漸く意識がすっきりとするような気がする。

「あーっと、迎えにくるのが十一時ぐらいだから、後一時間か？
まぁ、のんびり準備しても大丈夫か。必要な荷物は玄関にまとめて

あるし……」

バスタオルで頭をガシガシ拭きながら横目に玄関を捉えると、そこには牛のブロック肉が入ったクーラーボックスと着替えやら水着といったこまごましたものを入れた登山用の大型リュックが、存在感を主張しながら玄関脇に鎮座していた。

二杯目の麦茶を注いで手に持って、生活の大半を過ごす自室へと帰るとテーブルにコップを置いて、リモコンへと手を伸ばす。

電源スイッチを押して、リモコンをクッションの上へ放り投げてから、パンツを履く。

だが、パンツは腰へと収まらず足の途中で止まる羽目になった。

なぜなら……

「はあ？　なんでテレビ映んねーんだ？　故障か？　けど、昨日寝る前はちゃんと映ってたよなぁ」

その視線の先には不快な音を奏でるテレビモニターがあった。画面には何も映ってはおらず、目がチラつく砂嵐だけが映されたいた。

パンツを履いて、リモコンを拾いあげるとパチパチと放送局を変える。

しかし、どの局も何も移らず、チャンネルをいくら変えようとも画面には無機質な砂嵐しか映らない。

恭平はテレビのアンテナ配線を確認したり、テレビを叩いたりするが一向に直る気配すらなかった。

（勘弁してくれよ……。出かける時に管理人に声掛けて、アンテナに異常が無かったらテレビどうしよ）

どうにもならないテレビの電源を落とすと出かける用のTシャツ

にハーフパンツというラフな格好に着替えて、ベッドの上に置いて充電しておいた携帯電話を見る。

「あれ？　なんで？」

携帯の時計は十時半を示していたが、恭平が素っ頓狂な声をあげたのは、そこではなく携帯の電波強度を示す表示を見てだ。
普段は三本から悪くても一本はほぼ立っている筈の表示は無情にも県外を示していた。
一度電源を落として、再起動してみるも県外のまま変わらない。

（なんだよ……。料金はちゃんと払ってあんだろ！）

もしかしてと思い慌ててノートパソコンを起動してみると、どうやらパソコンは通じているようだ。
携帯会社のＨＰを急いで検索して、何かお知らせ来ていないか？メンテナンス情報なども見てみるも、それらしい記述はどこにも見当たらない。

「マジかよ！　佐竹と連絡取れないじゃん！　勘弁してくれよぉ。マジで！」

愚痴を言っていた所で携帯電話が直るわけでもテレビが直るわけでもない。
恭平は深く溜息をついて携帯電話をポケットに入れる。
一縷の直る事を祈りつつ、もし駄目だったら契約した店舗に途中寄ってもらい、代替機を借りようと思いなおす。

「テレビは壊れるわ。携帯は壊れるわ。マジついてねぇ……。幸先悪いな」

本来、楽しいはずの女の子を交えてのバーベキューの日だというのに朝からこれでは気分が乗らなくなるのも頷けるものである。
気分転換も兼ねて、もう外で待とうと考えて玄関へと向かう。靴を履いてリュックを背負いクーラーボックスを肩に掛けると玄関の扉に手を掛ける。
管理人になんと言って行こうか考えながら押し開いた。その扉の向こうには……

「……は？」

ジャングルのような高い木々が密集した。まさに密林が目の前に広がっていたのだった。

禍福は糾えるザイルの如し

恭平が密林に飛ばされて一週間が経とうとしていた。
その間に何かしていたと言う訳ではないが、ただ、恭平が現実を受け入れられるようになるまで長らく時間が掛かっただけだ。
一週間でした事といえば積みゲーが一本消化されたぐらいか。

この文明とは程遠い密林でゲームが出来るのである。
ここが現実であると気付いてまず初めに疑問に思ったことは、電気が通っている事だった。
電気だけではない。ガス水道に至るまで飛ばされる前となんら変わることなく使うことが出来た。
そこで色々と実証する事にしたのだ。
そうして、一週間の成果としていくつかわかった事があった。
一つ目はテレビ、携帯はどこにも繋がらない。これは予想していたのでなんら問題はない。

恭平が驚き我が目を疑ったのがパソコンと食料の問題だった。
色々、調べている時にふと朝パソコンが繋がっていた事を思い出したのだ。嬉しい事にそれは錯覚でも思い違いでもなかった。
パソコンを起動すると回線接続のランプが点灯していた。
しかし、喜ばしく無い事もあった。メールはおろか掲示板の書き込みも含めてこちらからのアクションをまったく反映しなかった。検索はできるのだ。だが、いざ書き込みやメールを送信するとエラーが表示されてどうにもならない。

最後に食料だが、これも異常としか言い様がなかった。
使用したはずの食材が元に戻っていたのである。

恭平は気のせいかとも思ったが、使ったはずの卵が……ベーコンが記憶にある使う前と変わらず存在していた。
何よりも決定付けたのは消費期限が近かった為に飲み切ったはずの牛乳が元に戻っていた事である。
こればかりは、恭平も自身の正気を疑ったほどだった。
恭平は試しに卵をきちんと数え、それを紙に書いた上で冷蔵庫に貼り付ける程に念を入れて、ゆで卵にして食べてみた。
果たして冷蔵庫を開けてみればそこには紙に書かれた数と同じ数の卵が整然と並んでいたのだ。そこで、恭平は仮説を立てた。
この部屋という空間にあった物質は消費しても減らないのではないか？　なんていうトンデモ理論な仮説ではあったが、それ以外に考えられなかったからだ。
恭平としては何故こんな事が起こっているのかはわからないが、食料の心配をしないで済むのは正直ありがたかった。
外に出れば食べられる物もあるだろうが、何が潜んでいるかわからない密林を出歩かねばならないのは勘弁してもらいたい所だからだ。

「ごちそうさまでしたっと……」

やや遅めの朝食を取るとシンクに食器を漬けて玄関へと向かう。
玄関では登山用のリュックにザイルやピッケルといった登山にでも登るのかのような荷物が置かれていた。
恭平はリュックを背負ってザイルを手にするとザイルの端をベランダの手すりに結び、部屋を通して玄関へと戻る。

「無いとは言えんからなぁ。部屋が元の場所に戻る時に外に居ましたじゃ目も当てられねぇ」

独り事を呟きながらザイルを腰に巻きつけて、ピッケルを手にす

る。
　万が一に部屋がどういう方法かわからないが、移動した場合ザイルで繋がってさえいれば、置いていかれる事がないだろうと考えていたからだ。

「今日の探索は玄関から十メートル以内！　志賀隊員行ってきます！」

　開けた玄関からザイルを地面へと下ろして、おどけるように部屋に向けて敬礼をする。
　気分はまるでどこぞの秘境やＵＭＡなどを探す探検隊気分だ。だが、あながちに冗談だけでは無い。こうでもして自分を奮い立たせないとこんな未開の地に踏み出す勇気など湧いてこないからだ。

　昨日、家から出た時には玄関扉を握ったまま、外を見回しただけに留まった。現実だという事を実感するためである。
　玄関から一歩出たとき、むせ返る青臭さとじっとりと絡みつく湿度が否が応にも現実だということをまざまざと思い知らされ、すぐに部屋の中に逃げ込んだものだ。
　不思議と外の臭いや湿度、音までも部屋の中には入ってこなかった。
　今日は昨日に湧いた疑問といくつかの実験の為に外へとでたのだが……
　相変わらずの臭いと湿度に早くも部屋に帰りたくなってくる。

「はぁ、なんでこんなことになっちまったんだろうなぁ……」

　愚痴を零しながら、玄関から一メートルほど離れると落ちていた木の枝を拾う。
　そして、振り返ると家に向かって力いっぱい投げつけた。

木の枝は開いたままになっている玄関へと吸い込まれると思いきや……

部屋に入る寸前、見えない壁にぶつかったように跳ね返されて、地面へと落下した。

恭介はそれを見て、一瞬だけ驚いたように目を見開くと、足元に落ちている小枝や石ころを次々と投げつける。

しかし、そのどれもが最初に投げた枝と同じく跳ね返されて地面へと落下する。

最後にポケットからスプーンを取り出すと玄関へと投げる。

スプーンはさっきまでの木石のように跳ね返される事も無く部屋の中――ダイニングキッチンの床にバウンドして視界から見えなくなった。

（やっぱり見えない力か何かが部屋という空間を隔絶してるのか……？）

次に玄関から右回りに家の壁沿いに歩く。ザイルの長さに限りはあるが玄関を中心に左右に半周ずつ回れればそれでいい。

右回りで家を回り、玄関から反対までくると下来た通りに戻って、今度は左周りで家を半周する。

これまた想像していたとはいえ、家の壁はまるで陶磁器の壁のように白く艶やかな色彩を放っており、その壁には外からの配線や上下水管の通っている様子もない。

濃い緑の密林にポツンと白い箱が立っているような異様な光景だった。

（くそ……！　なんだこれ！？）

少しは慣れたと言えど、ここまで異常な光景を見せつけられると

暑さや湿気とは違う汗が手の平を湿らせる。
恭平は表向きは冷静を保っているはいるが内心では、パニック一歩寸前だった。
普通の人なら既にパニックを起しているだろう。恭平が冷静でいられるのは趣味の登山で培った経験と食料が無限だという安心感からだ。
最後にリュックを背中から下ろすと、木の枝や小石、果ては落ち葉まで中に入れると背負い直した。

（落ち着け……落ち着け。今すべき事だけを考えろ！　情報の収集と解析、それと推測を埋めるんだ）

二度三度と深呼吸すると、気合を入れなおして周りと比較して茂みや木が密集していない方向へ進み始めた。
外で行う最後の実験は密林の木の種類を見て、植物を採取して持ち帰る事だ。
恭平は趣味の登山で野草には詳しい方だと思うが、それでもアマゾンなどの動植物はまったく知らない。だが、そこはパソコンという文明の利器が役に立つ。
特徴から検索して、大体の群生域などを調べれば、どこの大陸かぐらいならばわかると考えていたからだ。
だが、その希望は予想外な事で裏切られる事になる。
家から七メートルほど離れたとき、腰に巻いたザイルが軽く引っ張られた気がして振り返った。

恭平が振り返った視線の先には何もなかった。そう、“何もなかったのである”

一瞬前まであったはずの家が……恭平が唯一心の拠り所にしていた自宅が……音も無く。まるで最初から存在していなかったように

姿を消していたのだ。
あったのは結ばれた先を失ったザイルと、その切れた端が死んだ蛇の如く地面に横たわっているだけ……
「う……う、そ……え？　え！　えぇ！？」
足から力が抜けて、その場にヘタリ込みそうになるが這うように家があった場所へと向かう。
そこにはもちろん家などはなく。家があった痕跡すら残されていなかった。残されていた物は玄関の見えない壁に弾かれた物が散乱しているだけ……
家があった場所に立って見るも何も起きない。
恭平は今度こそ、その場にへたり込むと目から涙が零れ落ちる。
「……くっそ……くそっ！　予想してたじゃねーか！　馬鹿か俺……。くそっ……」
地面に垂れ下がるザイルの端を摘み上げて見つめる。そこには頑丈なはずのザイルが綺麗な断面を見せて途切れていた。恭平はザイルを地面へと投げ捨てて、顔を地面に伏せて、子供のように大声で泣き始めた。
その姿からは本来の冷静さなどは微塵も感じられない。
唯一の生命線と帰還への希望が目の前で消え去ってしまったのだ。残された物はリュックとピッケル、そして、中途半端な長さのザイルだけである。
こんな装備で猛獣が恐らく潜んでいるだろう密林を抜けることは到底不可能だ。
「ぅ……あぁ……ちくしょ……くっそぅ……何もこのタイミングで戻らなくてもいいじゃねぇか……くそっ……ぁあぁぁあ……っ！」

怨嗟の言葉を涙混じりに放ちひたすら泣き続ける。
どれほどそうして泣いていただろうか。泣き疲れて泣き言さえ漏らす気力を失った時にそれは聞こえた。
茂みが鳴る音と同時に聞こえてきた獣の唸り声……
喉の奥を低く鳴らすように聞こえてきた声に身を固くしながら、ゆっくりとそちらへと視線を向ける。
そこには病気で毛が抜けたハイエナのような頭を持ち二足歩行する化け物が居た。
身長一メートルほどの醜悪な化け物はボロ布だけを身に纏い、口から白い泡みたいな涎を垂らしながら、恭平を見つめている。

「ひぃっ！　……なんだよ！　こいつ！？」

どう見ても地球上には存在していないと思われる化け物に、小さく悲鳴を上げると地面に尻餅をついて後ずさる。
そんな恭平の姿を見て化け物は舌なめずりしながら、ゆっくりと恭平との距離を詰めてゆく。
恭平は必死に後ろへと下がろうと手足を動かすが、腰が抜けた状態では思うように動けず、精々数センチ後ろへと下がるのが精一杯だ。

「あっ……あ……ああっ！」

恭平を更に絶望させる光景が広がってゆく。
化け物の後ろ――茂みの中から一匹二匹と姿を見せ始め、遂には五匹の化け物が現れたからだ。
涎を垂らす口を見ると鋭い牙が整然とならんでいるのが見えた。
思わず、その牙で引き裂かれる自分を想像して、恭平は顔を蒼白にさせる。

化け物との距離はもう既に五メートルを切っている。見た目と同様に動物並みの身体能力があれば一足飛びに飛びかかられてもおかしくない。

（やられる……くっそ……痛そうだな食われるのは……ああ、家にさえ篭っていれば……）

心には諦観が押し寄せ、後悔だけが頭を支配する。

「はは……家があればこんな目に合わなかったのにな……」

その時――

信じられない光景だった。視界が光に覆われると今にも襲い掛からんとしていた化け物が密林の中へと弾き飛ばされ、目の前には消えたはずの家と、その玄関が現れていたからだ。

唖然とするのも束の間、地面に四つん這いになって、ほうほうの体で玄関へと転がり込む。

肩で息をしながら玄関に座り込み茫然自失で玄関の外を見つめる。

そこには突然現れた家に様子を見ながらビクビクとうろつく化け物がいた。

その姿を見ると頭がパニックになり、恭平はバタバタと後ろへと下がる。化け物はきょろきょろと見回していたが、ダイニングキッチンで後ずさっている恭平の姿を見つけなり、口をあけて何かを叫びながら玄関へと駆け寄ってきた。

しかし、化け物は例の見えない壁によって防がれて中には入っては来れなかった。

必死に何もない空間を引っ掻きで悔しげに顔を歪ませる。

その姿に、恭平は我に帰るとそぉっと玄関へと近付いてゆく。

「やっぱ入ってこれないのか……よかったぁ……マジで死ぬかと思った……」

恭平は魂から搾り出すように息を吐くと、ドアの開閉バネのロックを外して自動的に閉まゆく。それに伴って視界からは化け物の姿が隠れる。

いくら入って来れないといっても、流石にあの光景を見続けるのは心臓に悪いと言うものだ。

懐かしくも感じるダイニングキッチンの床に大の字で寝っ転がった。

背負ったままのリュックが、恭平と床で挟まれて適度な痛みが背中に走る。だが、その痛みに家にいるという事が夢で無いことを示しているようで逆に心地よかった。

「危険は覚悟してたけど……外はもういい……こりごり……」

それだけを呟くと極度の緊張から解き放たれた恭平は意識を手放したのだった。

出会いは雨と共に……

薄暗い森の中でシトシトと雨が降り注いでいる。
しかし、この雨はただの雨では無い。【瘴雨】と呼ばれている雨だった。【瘴雨】とは本来は透明なはずの雨粒が黄色で、その雨に長く当たっていると正常なモノも魔物に変異してしまうという恐ろしいものだ。
その発生原因は不明で一説では、魔王がいた時代の呪いだとか言われているが定かにはなっていない。

その【瘴雨】のせいで森の中は微かだが黄色く煙っている。そんな中を歩くフード姿の者達が居た。
一人はフードの端から剣を覗かせて、立ち居振る舞いから明らかに剣士とわかる。その剣士は周囲を油断無く警戒しながら進んでいた。その後ろを小柄な人がフードを同じように被っている子供を抱き締めて、剣士から決して離れないようについてゆく。
三人は昨日から振り出した【瘴雨】に疲れ果てた様子で足取り重く慣れない森を歩き続けていた。
突然、剣士が藪から飛び出してきた大きな蜘蛛を剣を一閃して切り払う。

「まさか、瘴雨まで降るとは……これでは魔除けの臭い袋も役に立たないな」

戦闘を歩く剣士が苦々しげに黄色い水溜りに落ちた蜘蛛の死骸へと愚痴を吐く。その言葉に後ろを歩いていた人物が肩を一瞬ビクッとさせると申し訳なさそうに口を開いた。

「申し訳ありません……私達なんかのために……」
「い……いやっ！　ソフィア殿に言ったのではなくて……その……」
「ええ、わかっておりますわ。けれども、レティシア様を私達の事情につき合わせてしまったのも、また事実……」
「……お気になさらないで下さい。これは私が好きでやっている事です。それよりも……シルヴィア殿の具合は？」

レティシアと呼ばれた剣士がソフィアに抱かれている子供――シルヴィアへと視線を向ける。
その視線を追うようにソフィアも心配げな瞳で腕の中で眠る我が子を見つめた。
二人の視線を受けるシルヴィアは苦しそうに熱い息を小刻みに浅く繰り返しているだけだ。
その顔は赤く一目で高熱に浮かされている事が見て取れる。

「先程頂いたお薬で、今は落ち着いていますが……このままでは……」
「雨宿りが出来るところがあればいいのだが、しかし……」

その言葉にソフィアの顔が曇る。
ここは普通の森ではなかった。この地域の人間は【瘴雨】の降り注ぐ森を魔の森と呼び、本来ならば好んで森へと入る者などはいないのだ。
魔の森とは【瘴雨】の影響で生態系が崩れ、木も、そこに住まう動物も魔のモノへと変化させてしまった森を指す。
その影響を受けるのは人も同じだが、大の大人ならばずっと浴び続けなければさほどの問題はない。だが、人として成長途中にある未熟な子供はそうはいかない。
死に至るならばまだましであろう。負の成長が止まらずに生き残ってしまったら……

レティシアは異形なる魔物と化したシルヴィアを自分が切り捨てる想像を浮かべて、背筋にゾッとしたものが走る。

「先を急ごう」

「は……はい！　よろしくお願いします」

さっきまでより幾分早い歩調で二人は再び歩き出した。シルヴィアの火が付いたように感じる体をギュッと抱き締めながら……

冷房の良く利いた部屋で、恭平は今日もゲームに勤しんでいた。命の危機から二週間が経とうとしていたが、あれから何かをしようとする気力すら湧かず部屋に引きこもっている状態だ。

気絶から目が覚めて、恭平が最初にしたことはシャワーを浴びる事だった。

目が覚めた直後は、あれは夢だったのではないかと思ったが、自分の格好や玄関の覗き穴から見た外の光景に夢ではなかったんだと思い知らされたのだ。

外をうろつく化け物達……時折、仲間に何かの合図を送っているのらしく、口を開けて何かを叫んでいる様子だった。

もちろん、見えない壁に守られて外界と完全に遮断されている部屋の中に、その声までは聞こえてこない。

覗き穴から目を離した恭平は自分の股間に違和感を感じて、登山用の頑丈なズボンの股間がじっとりと濡れている事に気付いのだ。

シャワーを浴びた恭平は部屋の隅に設置してある小型の物置へと向かい、中にしまってあった登山具を漁って、武器になるような物

を取り出していく。
出てきたものは下草を刈る為のマシェットと呼ばれる鉈に近いナイフとアメリカ産のクマ撃退用スプレー、更に登山に使うスキーのストックのような形の杖が二本でてきた。
登山に使うツルハシの形状を持つ、ピッケルは外に置いてきた事を思い出して苦い顔をする。
武器としては刃渡り五〇センチのマシェットや熊撃退スプレーの方がいいのだが、恭平として日頃使い慣れているピッケルの方が心持ち安心できるのだ。
恭平は武器を用意して、外の化け物を相手に戦う気などはさらさらない。
ただ、見えない壁で入って来れないとは解っていても、不安でどうしようもないのだ。
部屋に居ても外が見えてしまうベランダ窓にカーテンを閉めると電気を付けて、気を紛らわせる為にゲームをし始めた。そして、冒頭へと戻る。

「はぁ……これで積みゲーもなくなるかぁ……」

溜息をついてゲーム機の隣に置いてあるゲームソフトを見る。
そこには有名なアクションＲＰＧやシューティングゲームなどが置かれていた。
視界の端にこれまた某有名ファンタジーＲＰＧが未開封であったが、それを視界の端からも追い出す。
ファンタジーな世界でファンタジーなゲームをする。ある意味シュールな事だが、恭平がいるリアルなファンタジーの恐さは身に染みて知っている。だから、ゲームとはいえ死に掛けた経験からする気が起きるはずもなかった。

（しっかし……どうしたもんかねぇ）

ゲームを消して立ち上がるとカーテンを薄く開けて隙間から外を覗き込む。
そこには化け物は居なくなったものの不気味な密林に降り注ぐ、黄色い雨が目に映った。
昨日の朝から降り出した雨は今日も小降りながらも降り続いている。
黄色と言っても染料とかで黄色くなっているのではないのだろう。雨が当たっている木々の色はそのままで、地面も水溜りはともかく地面自体は黒々とした大地のままだ。
（なんか、映画であったっけなぁ？　雨に当たるとゾンビになったりして……）
嫌な想像を浮かべてしまった恭平は頭を振って、ゾンビと戦う自分の姿を思考から追い出す。
しかし、次の瞬間にチャイムの音が部屋に鳴り響き、恭平はその場で飛び上がると近くにあったマシェットを手にするのだった。

それは異様な光景だった。
魔物が蔓延る異形の森に白い箱の様な建物が一軒だけ、ポツンと立っていたのだ。
鬱蒼と茂る緑の中に浮かぶ白い空間……少しだけ雨脚の弱くなった【瘴雨】ですら、その建物を汚すまいと避けているように見える。
「あれは？」
余りの光景に唖然とし立ち竦むレティシアの後ろから声が掛かっ

た。
ソフィアもレティシアの後ろから建物を見ると、レティシアと同じように呆然とその異様な光景に息を飲む。
「建物だろうか？　いや、しかし……こんな場所に？」
「私はあのような白い建物を今まで見たことがありません」
この世界の建物は石作りの建物が普通で、ソフィアが居た村では木造が当たり前だ。
レティシア達一行の目の前に立つ建物は、そのどれとも当てはまらない。
継ぎ目はなく白くのっぺりとした壁、見たこともないような金属で出来た扉らしい物、全てが常識外の建物だった。しかも、その建物は薄く光を放ちまるで【瘴雨】を浄化しているようにも見え、汚れ一つ無い白い壁と相まって神々しく見えた。
「ともかく、ソフィア殿はここでお待ちを……もし、人が住んでいるならば休ませてもらえるように交渉してまいります」
「いえ……私が参りますわ」
ソフィアの思いがけない言葉に、レティシアは目を見開く。
「なりません！　もしも危険人物や魔物の住処であったとしたら……」
レティシアの強い反発の言葉に、ソフィアは悲しげに顔を歪ませて首を横に振る。
「わかっています……ですが、この子、シルヴィアは限界に来ています。このままでは持って一陽……いえ、半陽も持てばいいほうで

しょう。そして、この子がもしも死んだら私も生きている意味がありません……。レティシア様はどうか行ってくださいまし。貴女様お一人でしたら苦も無く森は抜けられましょう……」

ソフィアの決意が篭る悲しい瞳を見つめ、それから腕の中で眠る……否、気絶しているシルヴィアの顔を見る。

シルヴィアの顔色は熱に浮かされていた赤い顔を通り過ぎ、青白く死人のような顔色へと変化していた。

恐らくは今【瘴雨】が止んだとしても、体力の限界を超えたシルヴィアが死ぬ事は想像に難くない。手持ちの薬も残り一つとなっている。

もしも、ここに人が住んで居なかったら……、人が住んでいたとしても薬がなければ、シルヴィアはソフィアが予想したとおりに半陽（二時間）もしないうちに命が尽きてしまうだろう。

「わかりました……ですが、ここまできてお二人を見捨てるのは騎士道に……いえ、人道に反する行い、死力を尽くしてお守りし、最悪最後を看取ることが、ソフィア殿の夫――ゼル殿への恩返しと思っています。どうか軽々に命を粗末になさらぬようお願い致します」

「ありがとう……ございます……」

ソフィアは少し涙ぐみながら、頭を下げると異質な建物へと歩みを進めるのだった。

恭平はマシェットを片手に玄関へと近付いてゆく。

その足は微かに震えて、既に感覚すら失いまるで雲の上を歩いているようにも感じられた。

（あっ、くそっ！　熊スプレーの方を持って来ればよかった……）

手にずっしりとくるマシェットの重みに気付いて後悔する。戻って持って来ればいいかとも思ったが、恭平は戻ろうとせずに玄関へと近付いてゆく。

取りに戻るのは簡単だが、部屋に戻ったら再度玄関に行く勇気が持てるか疑問だったからだ。

どんなに派手な音を立てようとも外には聞こえないと解っているはずなのについ忍び足になり、覗き穴に目を当てる際にも音を立てないように細心の注意を払う。

その覗き穴の向こうには……

それはまったくの偶然だった。

レティシア達一行がドアを一枚隔てた場所に立ち、ドアを叩こうとしたが結界のような壁に阻まれて、叩くどころか触れることが出来なかったのだ。

レティシアが鍛えられた肺活量を生かしてあらん限りの声で家の主へと呼び掛けるも、まったく反応がない。

「留守……なのでしょうか？」

「ふむ、かもしれん……。だが、ここで諦める訳にはいかぬでしょう？」

真剣な眼差しでレティシアはソフィアを見つめる。その瞳にはいざとなれば力尽くでも押し入ると無言で語っていた。

（どうすればいいのですか……あなた……）

ソフィアは腕の中でどんどん上がっていく娘の体温を感じながら、妻と子を置いて死んでしまった夫に心の中で問う。だが、当然返事など返ってくるはずも無く。そして、答えなど初めから決まっている。

「……ぁう……お父さ……」

腕の中で今にも命の火が消えてしまいそうな娘が熱に浮かされたように呟くのが、ソフィアの耳に届いた。

「大丈夫……大丈夫ですからね……？　そう……きっと大丈夫……」

少しでも【瘴雨】から遠ざけるように――濡れてしまわぬように壁際にシルヴィアを寄せて、その上にソフィアが覆いかぶさり、自らの体を雨避けに使う。

その時、抱かれているシルヴィアの足が壁際にあった黒いボタンに触れた事に、ソフィアもレティシアも気付いていなかった。

恭平は覗き穴の向こうにいる人影を見て、一瞬呆けていた。

（人間……人だ！　フードと雨で男か女か解らないけど、人だよ……な？）

慌ててドアを開けようとした時に脳裏にあの醜悪な化け物の姿が脳裏に掠める。

だが、瞬時に頭を切り替えると玄関の鍵を開ける。

（大丈夫だよな？　あの見えない壁もあるし……、あ！　でもどう

やって家に招きいれたらいいんだ？　俺と触れてたら入れるのかな？）

愚にもつかない事を考えながらノブを回して、ゆっくりと扉を開ける。

そして、恭平は扉の前に立っていた人物と目が合った。そして、呆然となる。

覗き穴の魚眼レンズ越しではわからなかったがフードを被っていた人は女性だった。

意思の強さが窺える瞳、顔立ちはギリシャ彫像のようにバランスが取れた顔立ち、フードの隙間から見える美しい金髪が玄関から入る光で輝いている。

対してレティシアは警戒を深めていた。ドアが開いたのはいいものの、中から出てきた人物は見た事もないような鈍い光を放つ衣服を着て、大陸では見ない黒髪黒目……さらには魔法具のような光が外へと漏れ出していた。

何より、その人物が握っている物を目にした時に一瞬である想像が頭に浮かんだ。

乳母が聞かせてくれた民間伝承だ。深い森の中で旅人を襲ってはその肉を喰らう。食屍鬼の話だ。馬鹿馬鹿しいとは思うが、この異常な状況ならば在り得る話かもしれないと納得してしまっていた。

「ソフィア殿はお下がりを！　ハァッ！」

レティシアは目にも留まらぬ速さで抜刀すると剣を一閃させて、恭平の首筋に突きつけようとした。しかし、その目論見はあっさりと崩される。

細身の長剣は透明の壁に阻まれて、キンッと澄んだ音と共に半ばからポッキリと叩き折れてしまったのだ。

驚いたのはレティシアだけではない。連れのソフィアも恭平も驚きで目を見開く。

ソフィアは恭平の姿を見ると恐怖よりも何故か安心感が心を満たしていた。

ああ、これでシルヴィアが助かる。胸を撫で下ろした刹那だった。

何故かレティシアが剣を抜き放ち黒髪の男性へと突きつけていたのだ。

ソフィアの顔から血の気が失せる。下手に相手の気分を害せば助かるはずのシルヴィアが助からないかもしれないのだ。

そう思った瞬間には体が動いていた。

恭平も腰を抜かさんばかりに驚いていた。玄関先に立っていた女性に見惚れていて気がつけば、自分へと折れた剣らしき刃物を構えていたのだから、驚くなと言うのが無理な話である。

（なに！？　なになに？　なんで俺は剣向けられるんだよ！　俺はどこからどうみても無害な人間だろう……が？　あっ！）

今まで恭平は自分が右手で握ったままのマシェットの存在を忘れてしまっていた。

確かにドアを開けば、目の前には鋭利な刃物を握った男が立っている。しかも、全身が黒いジャージ姿で……。これではどこからどうみても不審人物である。

更には短めの髪はボサボサで無精ひげまで伸びている悪人面だった。

「あ！　ちょ……これは違うくて！　警戒してたっつか……」

今の状況に慌ててしまい向こう側には声が届かないということも

忘れて、マシェットを投げ捨てて必死に弁明する。
だが、そんな状態の恭平には構わず、玄関脇で恭平からは見えなかったソフィアが玄関の前まで無防備に歩み寄る。
そして、恭平の様子から声も届かないと判断して、見えない壁の前でシルヴィアの姿を見せると、必死に危急である事を訴える。
目からはポロポロと大粒の涙を零して、何度も何度も頭を下げた。

恭平はソフィアの必死な様子に腕の中でグッタリとしている子供を透明な壁越しに窺う。
フードでよくは見えないがそれでも顔は蒼白を通り越して青褪め、唇も寒さからか薄紫色に変化しているのがわかった。
明らかに死に掛けの病人……しかも、子供だ。
目にした途端、恭平は頭が真っ白になり、先程までのやり取りも忘れて玄関から手を伸ばした。そして、ソフィアが抱く子供ごと、家の中へと引っ張り入れる。
一刻も早く濡れた子供――シルヴィアを何とかしてあげたいと思う一心の行動だった。
ソフィアもそれにつられて玄関へと入ってゆく。母子が玄関に入った事を確認した恭平は慌てて、自分の部屋へと戻り、タンスからありったけのタオルを取り出して、ついでに冷房を暖房へと切り替える。
その動きはさっきまで剣を見て怯える情け無い姿はどこにもなく、手馴れている様子だ。
恭平の慌てる様子から害意は感じられず、ソフィアは心から安心するとシルヴィアを抱いたまま、その場でヘナヘナと崩れ落ちるのだった。

男の決意と女の希望

一人暮らしにしては多めのタオルを半分だけ取り出して手に持ち玄関へ戻ると、そこの床に座っている女性――ソフィアへと手渡す。

ソフィアは初めて見る素材の布地に目を白黒させるが、その様子に気付いた恭平がタオルを手に取るとまだ濡れているシルヴィアの顔を拭ってあげる。

そして、ソフィアへ確認するように目を向けると、ソフィアも得心がいったのかシルヴィアのフードを剥ぎ取り、湿ってしまっている髪を拭き始めた。

その合間を見て、恭平はシルヴィアの額へと手を当てる。

（あつっ！　なんだよ。この熱は……）

余りの熱さに驚いて、額から手を離す。代わりに今度はフードが剥ぎ取られた為に露となった手を握ると、手の先は体温を失い氷のように冷たくなってしまっていた。

「あ……あの……」

「いつぐらいからこんな状態なんですか！？」

「いえ……あの……半光日前ぐらいから……ですが……」

「……半光日？　それってどれぐらいから……ああ、くそっ。そうか名称が違うのか……」

「大丈夫でしょうか！？　私の子供なんです！　どうか……どうか……！」

（母子か……改めて見ると確かに似てるな……）

レティシアを氷の美貌と言うなら、ソフィアは砂漠のオアシスと言うべきだろう。
薄く蒼い髪は清廉な水を想像させ、今は緊張しているせいで歪んでいる顔ですらもどこか優しげに、少し垂れた瞳が美しさよりも可愛らしさを強調している。

娘のシルヴィアも似た様な風貌をしている事が何となく窺えるが、今は苦しげに顔を顰めて顔色を失った姿を見るに居た堪れなくなる。

「とりあえずはベッドに運びましょう。冷えた体のままではドンドン悪化します。俺の服を貸しますんで、向こうの部屋で着替えさせてあげてください」

ソフィアは申し訳なさそうに頭を下げるとシルヴィアと自分のフードを玄関に置いて、部屋の中に入ってゆく。

「あっ……！」
「は……はいっ？」
「あー、いえなんでもないです。早く寝かせてあげましょう……」

ソフィアは怪訝な表情で、恭平の後をついて部屋へと向かう。その足元まで泥の足跡が点々と玄関から続いていた。

（まぁ、西洋文化っぽいもんなぁ……格好からして……）

そう、恭平が家に上げてから気付いたのは、ソフィアは靴を履いたままだったのだ。
お陰で玄関付近と部屋へと続いているダイニングキッチンは所々に泥が飛び散ってしまっていた。

（掃除すれば済む事だし、今は緊急事態だしな）

タンスからウニグロで買ったスウェットの上下を取り出して、ソフィアへと渡すがそれを受け取ったまま動こうとしない。

いくら暖房を入れているとはいえ、濡れ湿っている衣服を着ていれば体は冷えてゆく一方だ。

「どうしたんですか？」

「あ！　……いえ、こんな高価な衣服をお借りするわけには……もっと、ボロで構いませんので……あの……」

「いや、別に気にしなくていいから、そんなに高いもんでもないですしね」

その一言だけを部屋に残して部屋から出てゆく。

ゴミの中から空のペットボトルを取り出して、給湯器の温度を最大まで上げた湯を中へと注ぎ込む。熱湯とまではいかない温度の湯でペットボトルが軽く歪むが、どうせゴミである。

恭平は構わずにそれを二つ作ると自室のドアをノックする。

「あの、着替え終わりましたか？」

しばらく中でゴソゴソした音が聞こえた後で、内側からスライド式のドアが開かれる。

「は……はい。あの……ありがとうございます」

「いやいや、お礼は後でいいから、ちょっと失礼させてくださいね？」

恭平は返事も待たずに部屋の中へと入る。
さっきから何度かしたやり取りで相手の反応を見ながら、何かをしてあげると何故か異常に遠慮される事がわかっているので、強引に物事を進める事にしたのだ。

案の状、少女はベッドに寝かされてはおらず、遠慮してタオルを下に引いただけの床に横たわらされていた。
体の上には自分が背負っていた荷物から出したのだろう、質素な布が掛けられていた。
それを見て一つ溜息をつくと、シルヴィアを抱き上げて遠慮せずにベッドへと寝かせる。
そして、布団を掛けてあげると布団の中……冷えた足首の下に湯を入れたペットボトルを簡易湯たんぽとして敷いてやる。

「あっ！　すみません……ありがとうございます……」

後ろで申し訳なさそうな声が聞こえたが、敢えて無視してシルヴィアの容態を見てゆく。
恭平はもちろん、医者でも医大生でもないがこの手の体調の崩れには、登山の経験上で何度も経験していた。

（風邪なんだろうけど、下手に薬で熱を下げたら拙いかも……まずは冷え切った手足を暖めて、体から汗をかかせる事を優先すべきだな……）

「この子のお母さんでよろしいんですよね？」

恭平は振り返って、後ろで心配そうに窺っていたソフィアに向かって問い掛ける。

「はい！　その子の母親です！」

（とても年齢的に母親には見えないけど、この世界の常識的にはいいんだろうな）

「今からいくつか質問しますから答えてください。解らなければ解らないで構いません」

恭平の問い掛けにソフィアは緊張した面持ちで小さく頷き返してきた。

「どれぐらい前に意識を失いましたか？」

「えっと、一陽前ぐらいになると思います」

（また、解らない単語が出てきたか……言葉のニュアンスから結構前みたいだけど……）

恭平は聞いた事もない単語に戸惑うが気にしている場合ではない。頭に浮かんだ疑問を思考の端へと追いやると、次々と質問をしてはソフィアが答えるといったやり取りを繰り返した。

恭平が聞いたところ、水も【瘴雨】のせいでしばらく前から飲ませていないこと、痙攣は今までしていないこと。そして、重大な事にこの症状は【瘴雨】と呼ばれる雨の影響で引き起こされたものであり、心配をしたウィルス性ではないらしいことを聞き出すことができた。

「薬とかはないんですか？」

「あっ！　薬でしたらレティシア様……ああ、剣を持っていた女性が持っています！」

そこで恭平とソフィアは同時に素っ頓狂な声を上げた。
先程からレティシアと呼ばれた女性の姿を家で見ていないのだ。

恭平とソフィアは慌てて、玄関へ向かいドアを開く。そこには、レティシアがまるで檻に入れられた熊のように玄関前でウロウロとしていた。
玄関に姿を現した恭平に気付くと、猛然とした勢いで近付いてくる。だが、その姿も透明な壁に阻まれて一定の距離からは近付いてこれないようだ。
透明な壁の向こうでレティシアは壁を殴りつけながら、口をパクパクさせて何かを訴える。だが、先程と同じで声は全く聞こえてこなかった。

「すっごく、怒ってますね……ははっ……俺ヤベェ」

恭平は少し前に見た剣を構えているレティシアの姿を思い出して、冷や汗が流れる。
まさに命の危機だ。しかし、だからと言って二人の連れであるレティシアを入れないわけにもいかないので……切羽詰った恭平は、ソフィアに助けを求める視線を向ける。
ソフィアもソフィアでどうしたものか悩んでいるようだが、またここでレティシアに問題を起させる訳にはいかない、と判断を下したのだろう。慌てて恭平に頭を下げた。

「も……申し訳ありません！　すぐに話してきますので結界を解いてもらえませんでしょうか！？」
「はえ？　け……結界って……ああ！　この壁みたいなのは、俺がどうこうしているんじゃないんで……と……とりあえず一度外に出て暴れないようにだけ、説得していただけませんか？　病人も居る

事ですし……」
「はい。はい！　すぐに！」
ソフィアは慌てて外へ出ると、外でレティシアと二言三言を頭を下げながら話し始める。
無論、恭平には彼女達の声は聞こえないのだが、どうやら不承不承ながら頷いたレティシアの表情から殺気だったものが消えたのを見て取れた。
一方のソフィアは安堵の表情を浮かべると、困ったような笑顔で、レティシアに頭を下げた。今度は恭平へと向き直り、深々と頭を下げる。
恭平はその姿にホッと胸を撫で下ろすと、透明な壁の外へと手を差し出す。
小さく柔らかいソフィアの手がそれを握り、レティシアはソフィアの空いている手を握る。　優しく引く恭平の手に誘われるまま、ゆっくりと二人が玄関へと入ってきた。
レティシアが透明な壁のあるところを、通る際に体がビクッを震えたのはご愛嬌だろう。

「さて、説明していただこうか……？」

入ってきた早々にレティシアは腕を組むと、恭平を睨みつけながら口を開いた。
その声音に怒りの色が見え隠れするが、母子を拉致したと勘違いしているとかではなく。単に放って置かれた事と自分だけが壁に阻まれた理不尽さに怒っているようだ。
「いや……その……説明より先に薬を出していただけませんか？子供の容態が悪化しないうちに……」
「そうでした！　レティシア様……誠に申し訳ないのですが……」

レティシアはハッとしたような表情を浮かべると、慌てて腰から皮袋を外して中から小さな丸薬取り出して、ソフィアへと手渡す。
それを手に急いで部屋へと向かうソフィア。それを恭平達二人が後を追う。
部屋は暖房のせいで外よりもムッとする熱気に包まれているが、必要なのは子供に汗をかかせる為なので、暑い事は気にしないようにして中へと入ってゆく。
ベッドの上を見ると額に汗を浮かべている少女の姿があった。顔色は幾分か赤みを取り戻している事に安堵する。

「あの……お水か何かを頂けましたらありがたいのですが……」
「あっ！　ちょっと待っててください！」

（あー……くそっ、俺も落ち着いてるようで動転してるな……まずは水分を取らせる事が最優先だろうが！）

恭平は自分の頭を拳で叩くと冷凍庫の中から氷枕を取り出して、コップに水を入れて砂糖を小さじ一杯と塩を二摘み程入れてよく掻き混ぜる。
ソフィアから聞いた情報から脱水症状も起していると思われる事から、スポーツドリンクがわりだ。
二つを手に持ち、部屋へと戻るとコップを手渡して、氷枕にタオルを巻いてから頭の下に敷く。そして、足元の布団を捲り上げて足に触れると、さっきまでとは段違いに温かみが戻っていた。
低温火傷を防ぐ為にペットボトルを取り出して、夏用の薄い布団の上に置いてやる。

「それは？」
「これは氷枕といって頭の熱を下げるために冷やす物です」

レティシアは頭の下に敷いた氷枕を指を差して胡散臭げに見つめるが、指先で少し触れてみて驚いた顔を浮かべるが、どうやら納得したようだった。
恭平はそんな様子のレティシアを視界の端に捉えながら、ソフィアへと視線を合わせる。
すると、そこには恭平から手渡されたガラスコップをどうすればよいか解らずに右往左往していた。

「それは経口補水塩と呼ばれている物で、その……効率よく体に水分――えーと、水を行き渡らせる味のある水です。毒ではないので安心してください」
「あ……いえ、そう言うわけでは……はい……」

恐る恐るコップに口をつけると、口の中に広がる少し甘いがなんともいえない甘みに、一瞬だけ驚いた表情を浮かべて、未だ意識を取り戻さない娘に向かって口移しで飲ませる。
その後で薬の丸薬と一緒に甘い水を口に含み、シルヴィアへと与えた。

「あの……レティシアさんでよろしかったですか？」

恭平はソフィアがシルヴィアに薬を飲ませる様子を見て、レティシアへと問い掛ける。
声を掛けられたレティシアは心配げに見つめていた表情を引き締めると、恭平へと視線を向けた。

「む？　何用かな？」

ややきつめの視線を向けられて、恭平は腰が引けるがそれでも聞

かなければと口を開いた。

「えっと、あの薬なんですが、どのような薬なんですか？　熱を下げる薬だったりとか？」

「いや……あの薬は瘴雨の毒を解毒する薬だ」

「え？　だったら、もう大丈夫なんですか？」

水分が補給されて呼吸が少しだけ穏やかになったシルヴィアを、レティシアは心配そうに見つめる。

「ただ、しょせんは解毒でしかないのだ。熱はまだしばらく下がらぬだろう。熱が落ち着くまで体力が持てばいいのだが……」

その言葉を聞いて、ソフィアは俯いてしまい背中に悲壮感が漂う。恭平はレティシアの言葉とソフィアの姿を見て、一つの決心した。

「事情はわかりました。俺も出来る限りの事はして上げたいと思っています。ただ……俺の事を信用していただけますか？」

レティシアはさっきまでとは違う恭平の雰囲気に訝しげな表情を浮かべ、ソフィアはベッドに向けていた視線を弾かれたように上げると驚いた表情の中に喜色を浮かべて恭平をみた。

「失礼だが……貴殿は治癒士か賢者であるのか？」

「ああ、いえ違います。その迷子って言うか事情があって、ここに飛ばされたと言うか……」

一縷の望みを込めて、レティシアは恭平に問い掛けたが、その歯切れの悪い物言いに落胆の色を見せる。

神殿に仕える治癒士や魔の森や魔法薬に詳しい賢者ならばと思っ

たのだ。しかし、レティシアの目で見ても、恭平がそんな大層な人物には見えない。
小さく溜息を吐くと、レティシアは呆れたように口を開く。
「申し訳ないが……我々にとってシルヴィア殿は大切な……」
「信用します！」

レティシアの言葉を遮り、ソフィアの凛とした声が部屋に響いた。
突然の事にレティシアは驚いた表情で、ソフィアを見つめる。

「ソフィア殿！？」
「申し訳ございません。レティシア様のお気持ちは大変うれしく思います。ですが、私達にはもう成す術はないのが実情……、この御方とは会って間も無く名も知らぬ仲ですが……短いながらも今までの行いを見る限り、信の置ける御方と思います。
それに恐らくですがあれほど自信に満ちた言葉だったのです。きっと何らかの方法をお持ちだと存じ上げます」

「え！？　そうなのですか？」

ソフィアがニッコリと微笑みながら、レティシアは驚愕に目を見開いて、二人の視線が恭平に向けられる。

「うぇっ……あ、いや、過剰な期待は困りますけど……、俺も色々と調べた上で治してあげたいというのと、後は試してからになりますが解熱剤……熱冷ましの薬ですね？　もありますから、何とかなると思うのです」

薬という単語を聞いて、ソフィアの顔が明るくなる。レティシアも難しい顔をして何やら考えていたようだが、渋々ながらも頷いて

みせた。

「先程は失礼致しました。シルヴィア殿は私にとって恩人の大切なご息女なのです。

どうか……どうか！　よろしくお願い致します！」

「私の娘を……シルヴィアを……どうかよろしくお願い致します」

二人は恭平に向かって腰を折り、深々と頭を下げる。

それを見て、恭平は急に信用に対する責任の重さを感じて、軽々しく“信用”などと口にした事が恐くなったが後悔はしなかった。

（子供があんなに苦しんでいるってのに、何もしないなんて後味が悪すぎるだろ！）

恭平は両頬を手の平で強く叩いて気合を入れる。助けると決めたのだ。全力で助けようと、新たに決意を固めるのであった。

笑顔の時　おじさんと呼ばないで……

「おかしい……いくらなんでもこれは……」

恭平は目の前の光景が信じられなかった。

あれから、恭平は一刻を争うと解熱剤を子供が飲む量を更に半分にしてから与えたのだ。

今まで科学薬品というものを飲んだ事が無い事を考慮しての事だった。恭平は何かの本で薬を一度も服用した事が無い人に薬を与える話を覚えていた。

その中では医者も驚くほどの高い効果をあげたというのだ。この世界の住人を原住民扱いは酷いかもしれないが、科学薬品を飲んだ事が無いという点では同じ事である。

（確かに利き過ぎるかもかもしれないと思ってたけど……これは異常だろ！？）

シルヴィアの額に手を当てながら、信じられないものを見るような気持ちで血色もよくなり、呼吸も体温も落ち着いた少女の顔を見つめる。

その横では心配そうに見つめる母親のソフィアとレティシアの姿があった。

「そ……それでどうなのでしょうか！」

娘の額に手を当てたまま、驚いた顔を浮かべ何も言わない恭平に

嫌な予感が走る。

「あ……いや、確かな事は言えないですけど、もう大丈夫だと思います。あ！　でも、一応数日は大人しくしておいた方がいいですね。熱は下がってますけど、体力はかなり消耗しているでしょうから」

恭平の言葉に安堵すると同時に感極まったのだろう。水色の瞳から見る見る涙が溢れ出し、大粒の涙が頬を伝ってゆく。

「あぁ……ありがとうございます！　ありがとうございます！　なんとお礼を……」

「ああ、いいですいいです！　気にしないでください！　頭を上げてください！」

涙を零しながら蹲るように頭を下げて顔を伏せるソフィアに、感謝をされ慣れていない恭平はうろたえる。

「私からも礼を言わせていただきたい。本当にありがとうございました。それと入り口にて剣を向けた非礼を心からお詫び申し上げる」

レティシアも恭平へ向き直ると居住まいを正して深々と頭を下げる。

恭平は一気に居辛くなった空気から逃げようと立ち上がった。

「お腹……そう！　お腹空きましたよね！？　この子ももう直ぐ目を覚ますと思いますので、病人でも食べれるものを作ってきます！」

それだけを言い残し、部屋から立ち去ろうとした。その時だった。

「……ぅ……。オジちゃんだぁれぇ？」

うろたえて声を抑える事を忘れたせいか。はたまた、立ち上がろうとベッドに手を付いたのがいけなかったのか。ベッドで眠っていたシルヴィアが、微かな呻き声と共に瞼を開き、青く綺麗な瞳を覗かせたのだ。

「あ！　ゃ……やぁ、目が覚めちゃったか。ごめんな？　起しちゃって……」

突然聞こえてきたシルヴィアの声に、恭平は驚いたがなるべく恐がらせないように笑みを浮かべて、優しく語り掛ける。

「ままはぁ？　どこぉ？」

見た目は五歳から七歳に見えるが、その年齢とは思えぬほどに言葉はたどたどしく。熱でどれだけ体力が落ちているかが窺い知れた。

「ママはね。すぐそこにいるから安心していいよ。お腹は空いて無いかい？」

「ん～ん……」

少し不安そうだったシルヴィアも恭平の優しい口調に安心したのか。布団の中で微かに首を横に振る。

「そっか……。でも、もう少ししたらお腹が空くと思うから、何か作ってあげよう。それまでママとお話して寝ていような？」

「……ん」

（まだ、安心はできないけど、これだけ受け答えできるって事は意識がはっきりしてるって事だよな？）

まだ、体のだるさが残っているのか弱々しく頷くのを見て、恭平は後ろで心配そうにしていたソフィアへと目で頷いて見せる。
母と娘の感動の場面に部外者は邪魔者だと、恭平は立ち上がってダイニングキッチンへと向かった。

大き目の鍋に研いだ米を入れて煮込む。恭平は病人にはやっぱりタマゴ粥だろうと思い、作り始めたのだ。鍋の火加減を見ながら色々と考える。
お粥の事ではなく、この世界のこと……人と出会ったお陰で、生きる希望が湧いてきたと同時に不安も出てくる。
恭平としては、人類がいる事がわかったのは本当にありがたいことだった。家に引き篭もりゲーム三昧だったとはいえ、何も考えずに済んだ訳では無い。ふとした時に人類と呼べるものが居ない世界だったらどうしようだとか、不安に感じていたのだ。
だが、文明を持つ人類がいるという事で、別の不安も湧いてきた。
恭平にとって、この世界は本来居るべき場所ではない。この世界にとっての恭平は単なる異物であり、居場所などありはしない。
それは単に知り合いがいないだとか、家族がいないとかではなく、文明を持っているという事は法があるという事だからだ。
人が動物とは違う所はそこだと恭平は思っている。人が集まって集団となると必ず公式非公式に関わらず秩序が存在し、それを取り締まる法が出来る。
その法において、自身の身分を証明できないというのは致命的だった。最低限の人権……生存権ですら認められない。
さらには三人の来訪者が身に着けていた服装や剣といった原始的な武器を見る限り、そこまで穏やかな世界でもない事は想像に難くない。

（ゲームで言う所の村人Ａ以下なんだよなぁ……俺……どうしたも

んか？）

煮立て過ぎないように鍋を掻き混ぜながら、深く溜息を付いた。
人のいる場所で住みたい。けれども、人のいる場所は恭平にとっては、ある意味ここと大差がない危険な場所でもあるのだ。

「なんで、こうなっちまったんだか……」

ダイニングキッチンに恭平の深い溜息が響くのだった。

部屋ではシルヴィアのはしゃぐ声やら楽しげに話す声がしていた。
それにソフィアは心温かい微笑みを浮かべて、頷いたり相槌を打ったりとしている。

「しかし、シルヴィア殿を治した薬といい。この部屋の明かりや見た事もない魔道具といい。あの方はもしかして、名のある御方なのかもしれません」

レティシアは部屋の中を見回して、ポツリと呟いた。
それに同意するように、ベッドに腰掛けたソフィアもシルヴィアの頭を撫でながら、周囲を見回す。
天井から吊るされた蛍光灯を見たり、清涼な風を送り出しているクーラーを見つめる。

「かもしれませんね。この家の周囲に張り巡らされている結界も、あれほど頑強な物は見たこともありません」
「何か事情があるのか……？」

ソフィアはレティシアの言葉に含まれる警戒の色を感じて、静かに首を横に振る。

「どんな事情があるにせよ。この子の命を救って頂いた事には変わりありませんわ」

シルヴィアへと優しい瞳で見つめる。

ソフィアの言葉には咎めるような響きはなく、純粋に感謝の気持ちが溢れていた。それを聞いていたレティシアは少し寄っていたいた眉根を緩めて、笑みを零す。

三人は魔の森に入ってから四日しか経っていないはずだが、こんなにのんびり出来たのが久しぶりのように感じた。

野営の時ですら魔除けの香を焚き、碌に安心して眠れる状況ではなかったのだ。

ゆったりとした時間を堪能していると部屋の扉が開かれた。ふわっといい匂いが漂い、恭平が部屋に入ってくる。

「お腹が空いただろうと、ご飯を作ってきたんですが……」

ダイニングキッチンのテーブルにはお粥と簡単な料理が並べられ、いい匂いはそこから漂ってきているようだ。

「ああ！　そんな……何から何まで本当にありがとうございます！」

暖炉が無いから食事と言っても精々が硬いパンか、あっても冷えたスープだろうと思っていたソフィアは湯気が立つテーブルの料理に恐縮する。

「気にしなくていいです。そんなに感謝される事はしてません。困

っている時はお互い様でしょう？　それに色々と聞きたい事もあるんで、情報料の先払いとでも思ってください」
「……聞きたいことですか？」

苦笑交じりの言葉に、ソフィアは怪訝な表情を浮かべ、レティシアは少しだけ警戒する。

「ええ、こちらの事情も話したいと思いますので……。あ！　そう言えば名前も言ってませんでしたね！　俺の名前は志賀恭平と言います。名前が恭平で姓が志賀です」
「この度は助けていただき感謝の言葉もございません。私の名前はソフィアと申します。こっちが娘のシルヴィアと申します。ほら、シルヴィアご挨拶は？」

ソフィアに促されて娘のシルヴィアが母の膝から体を起して、ベッドの脇に立ち上がると母と同じようにペコッと可愛らしいお辞儀をする。

「ぅ……ありがとぅ……おじさん！」
「お……おじ……どういたしまして……けど、お兄ちゃんと言ってくれるとうれしいな？」

シルヴィアの屈託の無い笑顔から飛び出してきた言葉に、恭平はショックを受ける。だが、サボサの髪に無精ヒゲを生やした自分の容姿では、そう言われても仕方が無いと苦笑して頭を掻いた。

「シルヴィア！　も……申し訳ございません！　お若いです……よ？」
「いや、気にしてないんで……ははっ……」

フォローになっていないソフィアの言葉に、恭平の心はさらにダメージを受ける。

「最後は私だな？　名のる事が遅れて申し訳ない。私はレティシアと申します。故あって家名を名乗る事はできないが、どうかご容赦の程を……」

最後にレティシアはその場に立つと、折り目正しく綺麗な礼を見せる。

「それは俺も同じなんで……、しょうがないですよ。非常事態だったんですから！　それより自己紹介も終わった事だし、飯にしませんか？　作った料理が冷めないうちに……」

食事という言葉に反応したわけでもないだろうが、タイミングよく部屋に腹の虫が鳴く音が響いた。

恭平が音がした方に目を向けると、冷たい印象だったレティシアが顔を赤くしてにして俯く。

「あー！　虫さんが鳴いたぁ！」

「あっ……。こら！」

シルヴィアの子供らしい無邪気で酷い言葉で、レティシアは耳まで真っ赤になった。恭平はやれやれと肩を竦めると助け舟を出すべく口を開いた。

「あははっ、お兄さんのお腹が空き過ぎてお腹の虫に叱られちゃったよ。さぁ、シルヴィアちゃんもお腹が空いたろ？　早くご飯にしようか？」

恭平はそう言うと、さっさとダイニングキッチンへと戻る。シルヴィアもベッドからゆっくり降りると、恭平の後へと続いてゆく。

「……悪い人では無いようですね……？」

「ええ……、優しい方ですね……。さぁ、レティシア様。遠慮すぎれば不敬と申しますし、遠慮はやめて食事を頂きに参りましょう。また、虫に叱られるうちに……ふふっ……」

「〜〜っ！　ソフィア殿まで……勘弁してください……」

レティシアはまだ顔を赤くしたまま、ジトッと横目で睨むと、ソフィアはコロコロと笑いながら部屋から出てゆく。

肩を落として大きく溜息を吐くと、レティシアもダイニングキッチンへと向かった。また、腹の虫に叱られる前に……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4763x/

玄関あけたら二秒で異世界

2011年10月21日06時40分発行